

1987(昭和62)年3月9日

松本 純

父 松本 純

1919(大正8)年7月12日生まれ (67歳)

1987(昭和62)年3月9日午後2時42分 右中脳動脈瘤破裂の為死去

父の死

[脳動脈瘤の発見]

昭和61年6月20日、野毛地区街づくりを考える総会が横浜迎賓館にて開催され、副会長理事として挨拶をしたがあまり歯切れは良くなかった。そして6月の末、書類整理中、右手が利かない、舌がもつれ話しにくいと言い出した。早速、岡田先生の診察を受けたが、脳出血の疑いがあるとのことで、さらにCTスキャナー等を使い脳内のチェックを行う。結果は左中脳軽微出血による右手しびれと言語障害であった。薬剤投与だけでそれは軽減し治療することが出来たが、右中脳内に巨大動脈瘤を発見。動脈硬化もかなり進んでいた。

同年7月17日東神奈川の済生会病院に入院。脳外科の平井先生の執刀によりコーティング術を施す。しかし、何せ脳内のことで危険度は高く、万が一の事態も考えざるを得なかった。病気の根元をすべて排除することは出来ない、消極的な手術がこのコーティング術である。しかし、意識、運動能力にはなんら影響せず、父の人格は術前と全く変わらない。5年持つか、10年持つか分からないが粹な人生を送ってきた父には最善の方法だと思った。無事に手術は終わった。麻酔から覚めた父は「ああ、また目が覚めた。生きていて良かった」、また暫くして「入院中、トイレでタバコを一本吸ってみたが、うまくなかったよ」と苦笑いしていた。

その後、順調に回復し8月23、24日の夏祭りには散歩が出来る程だった。協同組合理事長、民生委員としての仕事も徐々にこなし始め、特に野毛本通り整備計画には積極的であった。食欲もあり、エスエスチェーン顧問として各地で開催される部会に出席したり、九州の旅では久しぶりに兄夫婦に会うことができ大変喜んでいて。昭和62年の正月も元気に迎えることが出来た。

今年は例年に比べると大変温かい。年を明けたころから、気がかりな変化が出てきた。父は混乱を防ぐため個人、法人とも自分の実印を使用していたが突然、会社印を作ってきて改印届を出してきたり、役員の変更を口にするようになった。そして、2月に入ると急に母が父を心配し始めた。それは、父が自分から語り掛けるのを止めてしまったからである。母がしつこく返事を求めるときは重い口を開いたそうだが、それ以外は何かを考えているように視線は遠くを見つめていた。

毎週日曜日になると松坂屋へ遊びに連れて行ってくれるお爺ちゃんが大好きだった孫たちも3月1日の日曜日は遊んでくれず、怒りもせず、ただ黙っている父が不思議だったようだ。しかし、3月3日には研(弟)の長女みどりの節句の祝いに出掛けたり、対外的なボランティアには普段通り出ていたので、体調が悪いのではなく、父は仕事の生き甲斐を無くしたことが無気力の原因だろうと母は思っていた。

[動脈瘤の破裂]

今年(平成62年)は4月に統一地方選挙がある。地元でも松村千賀雄氏が3月3日、北村清之助氏が3月5日にそれぞれ野毛地区センターで市政報告会を予定していた。3月3日は父も出席し松村氏の話にじっと耳を傾けていた。そして3月5日には県商連会長の北村氏ということで野毛協同組合理事長である父が地元を代表し応援演説を依頼されていた。当日は私も出席し一番後ろに席を取った。前方右の雛壇席に着いている父を発見した時、私は一瞬大丈夫かなと一抹の不安を感じたが、父は自らの意思で語ろうとしているのだと思い直しその不安を掻き消した。

昭和62年3月5日午後7時10分。会場の地区センターには80名程の地元の方が集まり、三橋氏の司会で開会。後援会長の挨拶の後、7時15分から父の話が始まった。

「この野毛地区の選対委員を代表しご挨拶をさせていただきます。統一地方選挙まであと29日と迫って来ていますが、過去の例を見てみると、当地区の投票率は43%で、中区のなかでは寿町の40%についてワースト2の記録を持っています。平均が45%ですから、この野毛地区の力を表すには少なくともこの45%以上の数字を確保する努力をしなければなりません。野毛本通りにおける道路整備も今年の秋完成を目標に着々と進んでいます。これについても行政の方々の協力が無ければできないことである。今後の — — — マイクが変だね — — — 地域においての — — — マイクがだめだ (マイクヘッドを握った為ハウリングを起こす) — — — キーン — — (5秒程何かを語るがトーンダウンし低音になり呂律がまわらない。マイクを握ったまま演壇に立ち尽くす。)」

「マイクが変だね」の時点で私は「アッ! やってしまった」と髪の毛が逆立たんばかりショックで自席から飛び上がった。隣席の藤代氏に「やめさせて! そばに行って助けて」と叫びつつ救急車の手配に駆け出した。連絡を終わり父の所へ戻ると5~6人の方が父をかかえソファにそっと寝かせていた。父の様子は額から手までうっすら汗をかき、いびきの様な音を出しながら呼吸をしていた。時々、吐き気をもよおすが食直後にも拘わらず何ももどさない。脈ははっきり打っているが半開きになった目はうつろで反応は無い。母は家から地区センターまで

飛んできたが、ただオロオロするばかりだったので、身支度をし、後から済生会病院へ来るよう指示した。救急車には私一人乗り込み、万に一つのチャンスをと祈りながら父の手を握りしめていた。気ばかり焦るがなかなか病院まで着かない。

到着するや否や処置室に入り治療が始まった。暫くして母と研が到着する。そして医師より状況の説明があり、最悪の状態を告げられた。ICUに移されたあと平井先生から説明があった。病名は右中脳動脈瘤破裂である。昨年7月にも言われた通り、その巨大動脈瘤は破裂をすると一瞬にして脳死を引き起こす。まさにその通りだった。何の痛みも、苦しみも感じない意識不明のまま昭和62年3月9日(月)午後2時42分心機能が停止し死に至った。

父の応援演説が始まった時は、久しく聞かないリンと響きわたる良い声であった。まさか5分後にこんな事が起きるとは、父自身も思っただけであらう。それから91時間22分、心臓だけがひとり働き続けていた。理屈では100%脳死は理解できる。しかし、その間血液は体内をめぐり、肌は温かく静かに寝ているようにしか見えない。

母はこの4日間、ICU待合室のソファで父の奇跡的意識回復をじっと待った。ICUのドアが開くたびにドキリとしながら。

今思い返してみると、自分の最期が近いことを父は知っていたのかもしれない。おしゃれな父には、一番似合う最期であったと私は思う。

以上